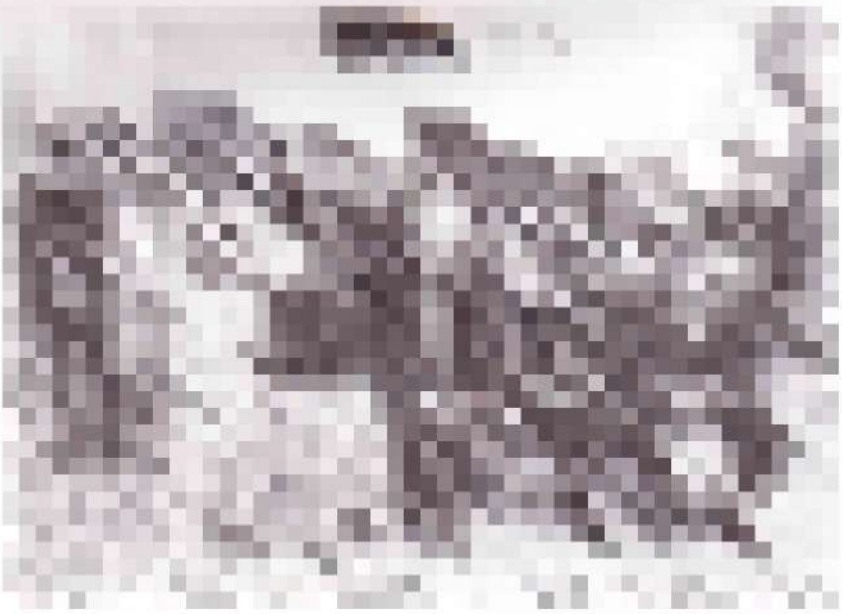
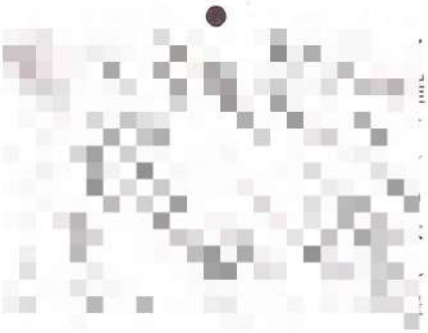


Opera チューリヒ歌劇場の《ルイザ・ミラー》

以前はチューリヒ歌劇場の常連だったレオ・ヌッチが、3年ぶりに（ヌッチ夫人談）当歌劇場に戻ってくるということで、期待されていた《ルイザ・ミラー》を4月24日に観た。

2010年のプレミエ時のキャストで唯一残っている彼は、8年の年月をあまり感じさせない熱唱で火をつけた。年間プログラムでは、ルイザ役にマリア・アグレスタの名があったが、当歌劇場デビューとなるニーノ・マチャイゼに代わっていた。その彼女も風邪を押しての登場ということで、多少セーヴした歌い方だったのと、リッカルド・フリッツァの指揮が、上品だがフレーズを引っ張る力が控えめだったからだろう、超ヴェテランのヌッチがアリアでオーケストラを牽引し、最後に高音を「これでもか」と鳴り響かせ、幼少時代のルイザ役の子供を抱き上げて袖に入ったあたりから流れが変わったようだった。それを受けて、出だしは立派過ぎる声が、小さめな当歌劇場では浮いてしまっていたマシュー・ポレンツァーニが、情熱的だが繊細なロドルフォの心情を立派に歌いあげた。朗々と声をひけらかして歌われることが多い、有名なアリア〈穏やかな夜〉も、細部まで歌詞で訴えて演劇性を与えた。そうして最後は完全にポレンツァーニが主役となり、その感情がビンビンと伝わって来て、終演後もしばらく手の震えが止まらなかったほどだ。モーツァルトからプッチーニまでこなせるテノールとなったポレンツァーニからは、これからも目が離せない。（中 東生）

最後には完全に主役になったというポレンツァーニ（左）、ルイザ役のマチャイゼ（中）、ルイザの父ミラー役のヌッチ（右）©Danielle Liniger